

## [資料紹介] J・S・ミルの初期書簡集

著者	杉原 四郎
雑誌名	関西大学経済論集
巻	14
号	2
ページ	271-279
発行年	1964-06-30
その他のタイトル	[Material] The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848, edited by Francis E. Mineka, 1963.
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/15400">http://hdl.handle.net/10112/15400</a>

## J・S・ミルの初期書簡集

杉原四郎

ミルの初期書簡集、一八二二年—一八四八年』全二巻として出版された。トロント大学版の新しい『ミル著作集』の第一二巻および第一三巻としてである。

一九五六年に出たI・W・ミュラーの『ジョン・ステュアート・ミルとフランス思想』<sup>(1)</sup>は、ミルの思想の形成過程においてはたしたフランスの社会思想の役割りをミルの少年時代までのフランス旅行(一八二〇—二一年)から一八四八年革命までの時期を中心として考察した好著であるが、ここでは、この時期にかかれたミルの未公開の多くの手紙が重要な資料として活用されていた。ミュラーによれば、<sup>(2)</sup>これらの手紙はコーネル大学のフランス・E・ミネカ教授によって蒐集されたものの一部であって、それらは近く教授によってまとめて公刊されるであろうということであった。<sup>(3)</sup>ミル研究者のみならず一九世紀の思想史に関心をもつ多くの人びとによって待ちのぞまれていたこの事業はようやく完成し、一九六三年、『ジョン・ステュアート・

本書に寄せられているハイエク教授の序文によれば、元来ミルの初期書簡集を編集するという仕事はおよそ二〇年まえにハイエクによって着手されたのだった。エリオットの編集による『ミル書簡集』(The Letters of John Stuart Mill, ed. H. S. R. Elliot, 2 vols., London, 1910)におおめられてゐる手紙はミルの晩年の二五年間のものが主であって、ミルの思想形成にとってより重要な初期の手紙の多くは、私的または公的なコレクションの中にうづもれたままで公表されておらず、すでに刊行されているものも、およそ三〇のちがった著作の中で分散的にとり上げられている、といった状態が、ミル乃至は一九世紀の思想一般の研究を非常にさまたげてきたのであるが、それを克服したいというのが、この仕事に着手したハイエクの念

願であつた。<sup>(4)</sup>當時ロンドン大学にいたハイエクは、戦時中の困難な諸条件の中でイギリスの各地に散在しているミルの書簡を探索する仕事をつづけたのだが、彼のシカゴ大学への転任によってその仕事は中断されることになり、彼自身としては、はじめは予期されていなかったこの仕事の副産物として、<sup>(5)</sup>ミルとハリエット・テラーとの往復書簡を一本にまとめただけで、この仕事を完成することをミネカに委譲したのだつた。

ミネカはコーネル大学の英文学の教授であるが、一九世紀前半におけるイギリスのユニークな評論誌「マンズリー・リポジット」の研究者として有名な人である。<sup>(6)</sup>一八二七年以来この雑誌の編集者であつたウイリアム・ジョンソン・フォックスは、ハリエット・テラーやミルの友人であり、そうした関係で彼らはこの雑誌の有力な寄稿者だつたのだから、<sup>(7)</sup>ミルにゆかりのこの雑誌の研究者によってハイエクの素志がうけつがれたのは自然であつた。原資料を活字化する場合の厳密な考証、手紙の内容に関する懇切な脚註、そして巻末につけられている詳細な索引、これらを通じてわれわれは、この仕事に対するミネカのなみなみならぬ熱意と高度の力備とを十分にうかがいしることが出来る。まことにハイエクは好適の後継者にめぐまれたといふべきであらう。

ミルの初期書簡集の編纂を一八四八年でくぐることは、ハイエクの決定によるものであるが、その措置は「当をえている」

と、ミネカは本書の緒言でのべている。<sup>(8)</sup>すなわち、一八四八年に「経済学原理」が公刊されたことを契機に、ミルは世間に広く知られた名士となり、彼の助言と意見とをもとめる多くの手紙がイギリスの内外からよせられることによって、それに応ずるミルの手紙もまた、それまでのものとくらべて質的にも大きく変化することになったからである。一八四八年までのミルの手紙は、大部分が親友や昵懇の人々にあてたものであるが、あたかもこの時代はミルにとって非常に重要な思想的形成期にあつたかといふことを率直に記録した手紙類は、ミネカがのべているように、ミルの理知のおよび感情的なメンタル・ヒストリーの諸側面をあらわにするものとして、「ミルの『自伝』の中でも最も興味ある感動的な諸節に対する最上の補足をなす」といってよいであらう。

本書に収録されたミルの手紙は総数五三七通で、全体の四五%におよぶ二四一通は本書ではじめて公表されたもの<sup>(9)</sup>、また七二通は従来部分的にしか公表されていなかったものである。それらはすべて特定の個人に対する私的な手紙であつて、新聞や雑誌に掲載することを目的として書かれた手紙や東印度会社の社員としての公的な手紙はふくまれていない。そして一八一二年七月二八日——これはミネカの考証による——つけのものから一八四八年一月二二日つけのものまで、すべて年代順に配

列されており、<sup>(12)</sup> それぞれの手紙について、(一) マニユスクリプトの所在地、(二) あてさきの人名と郵便の消印、(三) 従来公表されたものであればその場所、が註記されている。巻末には人名・地名・事項をふくむ一般索引の他に、通信者索引がついており、それによって、特定の人物に対してどれだけの手紙が出されているかを容易に知ることができる。八六名のあてさき人の中から、出された手紙の数の比較的多い人名をアルファベット順にひろい出せばつぎの通りである。サラ・オースティン。アレクサンダー・ペイン。トマス・カーライル。エドウィン・チャドウィック。オーギュスト・コント。グスタフ・デクター。アルバニ・フォンブランク。ロバート・B・フォックス。ウイリアム・J・フォックス。マクヴィ・ネピア。ジョン・ロバートソン。ジョン・スターリング。ウイリアム・テイト。A・C・ドウ・トックザイル。<sup>(13)</sup>

一九五七年五月—一九五八年三月のわたしのロンドン生活の主たる目的の一つはミル文献の探索にあつたので、その間わたしの通字していたL・S・Eの所蔵するミル・テイラー・ロレンションを中心としたミル文献をはじめとして、ブリテッシュ・ミュージアム、ゴルドスミス・ライブラリ、カーライル・ハウスなどに所蔵されているミルの手紙その他のマニユスクリプトを見てまわり、さらに足をのばしてケンブリッジのキングス・カレッジ・ライブラリ、オックスフォードのボードリアン・ラ

イブラリ、エディンバラのスコットランド・ナショナル・ライブラリ、セント・アンドリュース大学のライブラリなどをもたづね、それらに分散しているミルの手紙類をしらべたのだった。ミルの筆跡は、本書にもおさめられている二通の写真版がしめすように、それほどよみにくいものではないけれども、はじめのうちは一通のうちに大い多数カ所はどうしても解読できぬところがでてきて、図書館員の助言をもとめることがしばしばであった。本書の中でそうした手紙に接すると、旧知の人にめぐりあったようなつかしさを禁ずることができない。<sup>(14)</sup> 以下は、こうした個人的な感慨にふけりつつ内容豊富な本書をかいまみわたたしの感想である。<sup>(15)</sup>

(1) Mueller, I. W., *John Stuart Mill and French Thought*. University of Illinois Press, Urbana, 1956.

(2) *ibid.*, p. VIII.

(3) *The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848*, edited by Francis E. Mineka. Collected Works of John Stuart Mill, vol. XII & XIII. University of Toronto Press, Routledge & Kegan Paul, 1963. vol. I, 1812-1837, XXVII+366p., vol. II, 1838-1848, 367-784p.

(4) *The Earlier Letters of John Stuart Mill*, Introduction by F. A. Hayek, p. XVII.

- (5) Hayek, F.A., *John Stuart Mill and Harriet Taylor, Their Correspondence and Subsequent Marriage*, Routledge & Kegan Paul, London, 1951, p. 18.
- (6) Mineka, Francis E., *The Dissidence of Dissent: The Monthly Repository, 1806-1838*, University of North Carolina Press, Chapel Hill, 1944.
- (7) この雑誌にハリエット・テラーが寄せた詩二篇が前注(5)の著作の付録にのせられてゐる。ミルの寄稿については、彼の『自伝』の叙述を参照。
- (8) Mill, J. S., *Autobiography*, 1873, p. 197-8. 朱牟田夏雄訳『自伝』一七三—四ページ。なお本書簡集にはミルからフォックスあての手紙が二三通をめぐらしてゐる。
- (9) *The Earlier Letters of John Stuart Mill*, Preface, p. vii.
- (10) このうちミネカ自身によつて発見されたものは六〇通にのぼるといふ。ibid., p. ix, xviii.
- (11) そのうちあてなきの不明の手紙が六通ある。
- (12) ただし本書の刊行準備中にあらたに発見された三通の手紙は一括して巻末におかれてゐる。
- (13) このうちネピア(『エディンバラ・レビュー』の編集者)とテイト(エディンバラの出版業者)をのぞけば、いずれもミルと個人的に親交のある人々で、コントとディクタールとトックヴィルの三人のフランス人に対する手紙は、フランス語で書かれたものが多い。肉親への手紙は、父に対して六通、母に対して三通、弟妹に対して七通。祖母(ハリエット・パロー)に対して一通。ハリエット・テラーに対しては意外にすくなく、二通だけである。以上の人々のうち、サラ・オースティン、カーライル、スターリングの三人のミルへの手紙の一部が、彼らへのミルの手紙のそれぞれの箇所の脚注にとり入れられてゐる。ちなみにカーライルのミルへの手紙の一部が、最近邦訳された、『カーライル選集』第四巻、入江勇起男訳『妻と友へ』日本教文社、一九六三年。
- (14) たとえばカーライル・ハウス所蔵の一八三三年一月二五日づけのカーライルへの長文の手紙(p. 190-7)がそのうちである。一九五七年の秋の雨の午後カーライル・ハウスをおとすれ、陳列ケースのガラス越しにこの手紙をよんでいると、管理人のストロング夫人ができて他に入館者がないうままに話しこみ、ミルの手紙に興味があるのならいまその研究を大かぎりにやっているアメリカの教授をしつてゐるからおしえようといつて、その人の名前を紹介してくれたが、それがミネカ教授であつた。
- (15) これは書簡集には関係ないことであるが、本書のはじめにあるハイエクの序文の中で本誌のことが言及されてゐることを紹介しておきたい。ハイエクはその序文で二つの世界大戦の中間期におとろえていたミルに対する関心

が、この二〇年のあいだに次第に復活してきたことを指摘しているが、その箇所につきのような脚注をつけているのである。

「この新しい関心は決して西洋に限られるものではない。『関西大学（大阪）経済論集』第六卷第七号（一九五六年二月）の中に発表されたジョン・ステュアート・ミルの文献目録は、ヨーロッパの諸国語でかかれたミルに関するおよそ三五〇の労作に加えて、日本語の文献だけで一八〇以上の労作を記載している！」(ibid. p. xvi)。ミルの生誕一五〇年を記念してわれわれがつくった本誌のミル記念号——これは一九六〇年シカゴ大学に留学中の上田昭三氏を通じてハイエクに贈呈された——のことが、このようにして新しいミル著作集の中に記録されていることを、わたしはうれしく思っている。

## 二

本書は一八三二年以降の手紙については一年ごとにくぎって収録しているが、一八一二年—一八三〇年の手紙は、総数もすくなくまた断続的にしか現存していないので、一括して掲載している。その間の三八通の手紙の中でも、一八一二—一八二二年の間のものはわづかに八通であり、それにつづく一八二三—一八二六年の四年間には一通もない。ところがこの四年間は、

J・S・ミルの初期書簡集(杉原)

熱烈なベンサム主義者となったミルが、東印度会社の社員としての仕事の余暇に、『モーニング・クロニクル』、『ウェストミンスター・レビュー』、『パーリアメントリ・ヒストリ・アンド・レビュー』などを舞台に活潑な文筆活動をおこなうとともに、『功利主義協会』（一八二三年）や『ロンドン討論協会』（一八二五年）を友人とともに結成して相互の切磋琢磨にはげみ、さらにベンサムの大部の著作である『証拠論』の編纂事業にたずさわるといふように、彼にとっては実に充実した時期であるが、そしてミルの青年期における三つの興味ふかい事件——<sup>(2)</sup>座見制限運動にたずさわって検束されたこと、およびT・J・ウーラーとの間の人口論争とウイリアム・タムスンとの間の社会主義論争——もこの間に起っているのだが、そのような時代のミルの面影をつたえる手紙が一通も見いだされないのは、何としても残念である。

一八二七年に入ると、エドヴィン・チャドウィック<sup>(3)</sup>への手紙が七通と、J・ベンサムへとアーサー・エルマーとへの手紙が一通ずつ、計九つの手紙が収録されているが、最後のものはロンドン討論協会の会費の払いこみを請求した事務的なものだし、チャドウィックへのものもすべて些事を連絡するための短信で、多少とも内容的に興味をひくのは、ミルの努力で公刊の運びとなった『証拠論』の序文に彼の名前をあげたいというベンサムの申し入れを辞退したベンサムへの手紙だけである。周

知のようにミルは一八二六年の冬から翌二七年にかけてひどい憂鬱症にかかり、いわゆる「メンタル・クライシス」を経験するのだが、これらの手紙の文面からは当時のミルの直面したクライシスをうかがうことができない。あるいはむしろ、この一年間の手紙としてこれだけのものしかのこされていまいという事実がそうした状態をものがたっていると解すべきであろうか。一八二八年の手紙についても事情はほぼ同様で、収録されたものはわづか七つ、そのうち三通は「ロンドン討論協会」の会費についての事務的な短信であるが、その他の四通、すなわち、パリのシャルル・コントへの二通と、『ウエストミンスター・リビュー』の編集者ジョン・ボウリングと「有用知識普及協会」の秘書トマス・コーツとへのそれぞれ一通ずつの手紙は、ミルの文筆活動への意欲がやや回復してきたことをしめしており、とりわけ最後のものは、彼がその頃まとめた経済学上の論文の公表を協会に依頼したものであって、とくにわたしの注意をひくだけでも、これらの手紙の内容からは、かれが忠実なペンサマイトとして成長して来たその生涯の第一期を脱却して、新しい段階に移行したことをあきらかにくみとることは未だ不可能である。

ところが翌一八二九年になると、手紙の数こそわづか五通ではあるが、いずれも長文の、思想家の手紙らしい内容の豊富なものばかりで、しかもそのあてさまが、ディタールといいた

リングといひ、ミルが偏狭な功利主義から脱皮してゆく過程で非常に重要な役割りを演ずる人々であり、彼等とミルとの文通がこの年にはじまったことは、ミルが今やはっきりとその生涯の第二期に移行したことをしめしている。また一八三〇年には、七月革命を現地で見ようと渡仏したミルがその模様を父ミルに書きおくれた四つのパリ通信があり、さらに一八三一年に入ると、一八三・四〇年代におけるミルといろいろの意味で最も深い関係にあったカーライルとの文通がはじまるのであって、この書簡集も、ようやくこの頃から、巨匠の思想形成の過程をヴィヴィッドにつたえる記録にふさわしい充実した内容をもってくる。したがって本書は、形式的には一八一二—一八四八年の三七七間にわたる書簡集であるが、実質的には、一八三〇年の七月革命前後から一八四八年二月革命前後にいたるおよそ二〇年間の間に書かれたミルの手紙を、その主要な内容とするものだといつてよいだろう。

一八三〇年から一八四八年の時代というのは、ヨーロッパの思想界にとつて、これまで支配的であつた自然主義、個人主義自由主義に対し、歴史主義、国民主義、社会主義といった新しい諸思潮が抬頭してきて、それぞれの対立がたがいにからみあひながら、漸次新しい時代にうつつてゆく過渡期であるが、柔軟な思索力と鋭敏な時代感覚にめぐまれたミルが、こうした時代の動きの中で、いろいろの立場の人々との交流を通じてその

思想体系を形成してゆく過程を、この書簡集は具体的にかつ多角的にしめしている。たとえば、サン・シモン主義者の社会思想、コントの実証主義哲学体系、トックヴィルの政治思想などのフランスの新しい諸思潮をミルが撰取してゆく次第を、われわれはディクタルやコントやトックヴィルに対するミルの手紙からうかがうことができるし、ドイツの古典派の文字者や古典哲学に対するミルの関心は、カーライルやスターリングにあてた手紙<sup>(9)</sup>がこれをつたえてくれるであらう。それと同時に、本書は、この時代、とくに一八三六年に父ミルが死去してから後は哲学的急進派の思想的なリーダーとなったミルが、イギリスの当面する種々の時事問題にどのように対処し、当時のイギリスの評論界や政界にどのような役割りを果たしたか——乃至ははたそうとしたか——ということをおとづけてゆく上の資料としても活用することができる。ミルは一八三六年以来『ロンドン・ウェストミンスター・レビュー』の主筆となり、翌一八三七年にはその経営の責任をもひきうけて、自分の新しい思想をこの雑誌の性格に反映させてゆこうと努力した。さらに同じ一八三七年にはグラムを中心とする急進的な第三政党を結成することをくわだて、その実現にも努力した。これは結局不成功におわるのだが、このようなミルの当時の活動をめぐる具体的な諸事情は、前掲の人々に対する彼の手紙や、ジョン・ロバートソン（『ロンドン・ウェストミンスター・レビュー』の編集協

J・S・ミルの初期書簡集（杉原）

力者）やアルパニ・フォンブランク（『イグザミナー』主筆）への手紙などによってあきらかになるであらう。

だが本書は、このようないわば私人としてのミルの対人関係や社会活動の諸側面について資料を提供するだけではなく、いわば私人としてのミルの面影を、いろいろの角度から照し出してくれもする。あまりにも偉大な父をもった子としてのミル、九人きょうだいの長子としてのミル、そして人妻と熱烈な恋におちいったミル、このような一個の人間としてのミルの複雑微妙な感情の起伏を端的にあるいは婉曲につたえるところにこそ、手紙というものの本来のおもしろさがあるとすれば、ミルの社会経済思想を主たる関心事とするわたしが、たとえば本書ではじめて公表されたところの、アメリカの経済学者ヘンリー・C・ケアリにあてた一八四五年二月一五日づけの手紙や、チャールティスト運動の代表的指導者の一人であるウィリアム・ラヴェットとミルとの関係をしめす手紙<sup>(13)</sup>などだけに目をうばわれて、他をかえり見ないとしたら、本書に接するにはあまりにもせまい読み方といわなくてはなるまい。こころしてその豊富な内容を玩味してゆくことにしよう。

(1) この八通のうちで注目されるのは、一八一二年七月、六才になったばかりのミルがたどたどしい筆致で（写真版が巻頭におさめられている）ジュレミ・ペンサムにロー



## 關西大學『經濟論集』第一四卷第二号

一一一

マ史の書物を借りることをたのんでいる手紙、一八一九年七月サムエル・ペンサム(J・ペンサムの弟)に自分の勉学の状況をくわしく報告している手紙、そしてそのS・ペンサムとともに一八二一—一八二二年にフランスへ旅行したミルが、旅先からフランス語でサラ・オーステンと父のミルに出した一八二一年の二通の手紙およびグロート夫妻に功利主義協会の結成を報じた一八二二年一月の手紙などであろう。S・ペンサムへの手紙以外は本書ではじめて活字となったものである。

- (2) この三つの事件については、杉原『ミルとマルクス』(一九五七年)一七〇—一七七ページおよび杉原「J・S・ミルの初期の人口思想」(『經濟論集』第九卷第六号、一九六〇年三月)を参照。

- (3) チャドウィック Edwin Chadwick (1800—1890) はその頃法律の研究に従事していたジャーナリストで、後に政府の救貧法や工場・衛生関係の各種委員会のメンバーとなつて活躍した。一八三一—三二年にはペンサムの秘書をつとめた。ミルとは生涯を通じて友人関係にあり、ミルとの文通も多い。スコットランド・ナショナル・ライブラリ所蔵のチャドウィック文書にあるミルの手紙のほとんどすべては、本書ではじめて公表された。

- (4) この件については『自伝』にも言及されているが (*Autobiography*, p. 114-6, 前掲邦訳一〇四ページ)、ペンサ

ムの強い要請で結局ミルの名前がとどめられた。

- (5) *The Earlier Letters of John Stuart Mill*, p. 742. この論文は結局公表されなかったし、そのマニユスクリプトも現存していないようだから、その内容を知ることではできないけれども、この手紙の文面や「有用知識普及協会」の性格からみて、一種の労資関係論ではなかったかと推測される。

- (6) 一八二九年八月一日づけのスターリングへの手紙のなかで、ミルは自分が三年來ひどい憂鬱症にかかっていたことを告白していることが注目される。 *ibid.*, p. 29.

- (7) この四つの手紙のうち、最初の八月一三日づけのものはペインがその一部分を『ジョン・ステュアート・ミル』の中で引用して *ibid.* (Bain, A., *John Stuart Mill: A Criticism: With Personal Recollections*, 1882, p. 41-42) が、八月二〇日および二二日づけの二通はすべて『イクザミネー』の八月二九日号に無署名で掲載された。ミネカはつぎの論文で、これらの手紙がミルの父へのものであることを考証するとともに、新たに発見した第四番目の八月二七日づけの手紙を公表した。 Mineka, F. E., *John Stuart Mill: Letters on the French Revolution of 1830*, *Victorian Studies*, I, 1957, p. 137-54.

- (8) この三人への手紙類の中で、コントとトックウィルとに

対するものについては本書は従来公表されたもの以外の新資料をつけ加えていないけれども、ディクタールへの手紙は本書でかなりあたらしくつけ加えられた。

- (9) カールイルへの手紙について本書は多くの新資料を提供している。またスターリングへの手紙はエリオット編の書簡集より数がふえているわけではないが、エリオットが削除した部分がすべて復元されている。

- (10) ミルは一八三二年五月三〇日づけのディクタールとデュヴィリエあての手紙の中で、サン・シモン主義の卓越性をみとめながら、サン・シモン主義者が一方で経済学をイギリスの経済学者からまなぶとともに、他方ではドイツ人から歴史哲学や文学・芸術についてまなぶなら、その思想の一そうの発展に大いに益するだろうとのべている (*The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848*, p. 109)。ミル自身イギリスの経済学者の一人として、その思想を発展させるための養分を、ドイツ・フランス両国から吸収することにつとめていたことは、この書簡集がしめしている通りである。

- (11) たとえば、ミルが八人の弟妹の中でも最も愛していた二番目の弟のヘンリーが一八四〇年に二〇才で病死したときのミルの痛切な哀惜の思いを、一八四〇年四月一六日づけの P・B・フォックスあての手紙 (*ibid.*, p. 425-6) や同年一月二五日づけのディクタールへの手紙 (*ibid.*,

J・S・ミルの初期書簡集(杉原)

p. 455) の行間から十分に推察することができよう。

- (12) *ibid.*, p. 688-690. ミルはその中でケアリからおくられた『経済学原理』(Cary, H. C., *Principles of Political Economy*, Philadelphia, 1837-40) に対する率直な批判的感情を、貿易政策、労働価値説、収獲通減法則についてのべている。

- (13) 一八四二年七月二七日づけのラヴェットへの手紙 (*ibid.*, p. 533-4) は、彼が大衆の地位の向上の為に設立した協会にミルが協力する旨をしるすとともに、チャーティスト運動そのものには参加しえない所以をのべており、またラヴェットの友人 J・F・モレットにあてた一八四七年十二月の二通の手紙 (*ibid.*, p. 727-9) は、ミルがラヴェットを表彰するために拠金することをしるすとともに、ラヴェット派の運動方針の中に婦人の政治的平等があることをとくに多とするが、ラヴェットが兵役の義務を拒否することには原則としては同じ難いとのべている。